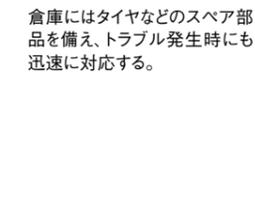


収集率は  
ほぼ100%に



整備も  
しっかりと



倉庫にはタイヤなどのスペア部  
品を備え、トラブル発生時にも  
迅速に対応する。



# 生活の基盤を整え 国の発展を



「コソボの今」

自立的な道を歩み始めて10年が経過したコソボ。課題を克服すべく、生活インフラの整備をはじめ、雇用促進、民族融和につながるJICAの協力が実施されている。

文●久保田真理 写真●阿部雄介

案件名 循環型社会へ向けた廃棄物管理能力向上プロジェクト  
2011年9月～2015年9月



## コソボ共和国 Republic of Kosovo

2008年に独立。EU加盟を目指す同国は自立的な経済の構築を最優先に進めたため、都市部では人口の増加もありごみ処理の問題が深刻化していた。

**急がれる経済発展と  
置き去りにされる  
環境問題**

ごみ収集車前に「エコリジョン公社」のスタッフが集合。現在203人のスタッフが、プリズレンの生活環境を日々守り続けている。

日本から供与されたごみ収集車のドアには日本の国旗が印されている。

## CASE 1 美しい町を美しく保つ

コソボは、2008年にセルビアからの独立を宣言して誕生したバルカン地域で最も若い国だ。長年にわたってユーゴスラビアとセルビアに経済的に依存し、自立的な経済構造が築かれていなかった。そのため、独立後は経済復興が最優先され、環境分野への取り組みにまで手が回らず、特に廃棄物処理は深刻な課題の一つだった。ごみ収集率が低く街中で不法投棄が増え、公衆衛生が悪化していた。そこでJICAは、コソボ第二の都市プリズレンで廃棄物の管理能力を向上させるプロジェクトを11年から15年まで実施した。その成果として、収集車の到着を知らせる音楽を聞きつけて住民がコンテナまでごみを持ち寄ることが習慣化され、市内にごみが散乱して悪臭を放つような環境は見られなくなった。

プロジェクト実施前には、同市でごみ収集業務を担う「エコリジョン公社」は、収集車の老朽化や財源不足などさまざまな理由から、ごみ収集を十分に実施することができていなかった。そこでコソボ政府の要請を受け、日本はプロジェクト実施と同時に無償資金協力も行い、収集車25台を供与して効率的な収集の実現に努めた。あわせて、廃棄物管理計画の立案支援などソフト面の協力も実施。「新しい収集車にはごみを圧縮する機能があり、収集能力が格段にアップしました。それにより、一度に収集できる距離が延びて、収集車の1日の稼働台数を減らすことができ、作業の効率化と費用の削減を同時に達成できました」と、支所長のアルバート・ガシさんは話す。旧型の収集車はごみからもれる液体で道路を汚すこともあったが、液体をためるタンクが付いた機能的な収集車に替わったことで、衛生的な収集業務が実現した。

収集車はその日の業務を終えて同公社の駐車場に戻ると、高圧洗浄機で毎日隅々まで清掃され、点検で不具合が見つかったら倉庫にそろえたスペア部品で修理が施される。日本人専門家から伝えられたメンテナンス方法に従い、スタッフは作業の要となる収集車を大切に扱っている。



音楽で  
お知らせ

左:ごみ置き場のコンテナの統一化を進めたことで、車両による自動収集ができ、人力から作業効率が向上。  
右:レストランなどが集まる商業的なエリアでは景観を優先し、コンテナは置かず到着を音楽で知らせる。

GPSで管理!



左:オペレーションスタッフのリザン・ポニツクさん(左)とヴェテム・ジャラさん。「GPS導入で時間の重要性を学びました」。  
右:GPSにより、ごみ収集車の現在地や収集場所での作業時間を記録。

### 効率的にごみを回収

また、プロジェクトでは同市の区域を五つに分け、収集場所と時間を細かく設定したルートを作成した。「定時に収集車がやって来ることで定期的なごみ出しに対する住民の意識が上がりました」と語るのは同社のオペレーションを管理するリザン・ポニツクさん。ごみ収集車にGPSを搭載して現在地を把握し、タイヤがパンクしたなどの緊急事態にも素早く対応して定時運行に努めている。「収集がうまくいくようになったことで、われわれ203人のスタッフとその家族も安心して暮らすことができ、心から感謝しています。今後はプリズレン以外の地域にもこのシステムを広げられたらと思っています」とガシさん。今後、経済発展とともに増えるであろう廃棄物処理の問題に、同公社で培われたノウハウが役立っていくに違いない。



### エコリジョン公社 支所長 アルバート・ガシさん

同公社は、プリズレンにおけるごみ収集サービスのほか、道路の清掃、除雪作業、公園や河川・湖畔などの自然環境の清掃も担当する。収集率アップのための住民の理解や意識の醸成にも取り組み、学校で課外授業を行うこともある。

# 企業が語る 西バルカンの魅力

日本人にはまだまだなじみの薄い西バルカン諸国。  
セルビアの首都ベオグラードに事務所を置く企業から見た、現状や魅力とは？



## ビジネスの裾野が広がる 三菱商事



ビジネスチャンスが  
多くあります！

セルビアに「TOYO TIRE」の欧州工場の設立を発表。2022年から  
タイヤ生産を開始し、ロシアやトルコを含む欧州市場の拠点になる。

三菱商事 ベオグラード駐在事務所長  
塚田直城(つかだ・なおき)さん

ソフィア駐在事務所長を兼務。2015年現職に就任。着  
任時、セルビアには日本商工会議所も日本人会もなかつ  
たが、日本企業のセルビア進出の一助になるとセルビア  
日本商工会設立に尽力し、17年に同会を設立した。

日本と西バルカン諸国間のビジネ  
スが徐々に盛り上がりつつあると  
感じます。2016年に「三菱日立  
パワーシステムズ」がボスニア・ヘ  
ルツェゴビナの石炭火力発電所に対  
して大気汚染物質を削減する装置を  
供給し、現在セルビアでも同様の準  
備が進められています。また今年7  
月には、弊社の資本・業務提携先で  
ある「TOYO TIRE」がセル  
ビアに欧州工場設立を発表しました。  
身近なところではクロアチアのマグ  
ロが日本に輸出されるなど、ビジネ  
スの裾野は着実に広がっています。

社内では、EU加盟前の国で大型  
の投資をすることを不安視する声も  
ありましたが、セルビア人は親日的  
で教育熱心、倫理観も高く、日本企  
業にも仕事のしやすい国だと思いま  
す。セルビア政府もEU加盟を見据  
え、海外からの直接投資に対するサ  
ポートが厚く、医薬品などのライフ  
サイエンス系から、歴史的に重工業  
の素地もある自動車関連をはじめと  
する製造業系まで幅広い分野でビジ  
ネスチャンスがあります。セルビア  
産ワインの質も高く、ブティックワ  
イナリー\*として日本でも認知度が高  
まっていますのでぜひ一度お試  
しくください。

\*小規模経営で生産量が少ないこと。

## 安全で自然豊かな国々 伊藤忠商事



大きな  
可能性を持った  
環境意識の  
高い国です

新鮮なフルーツや野菜などが豊富に並びセルビアのマーケットで売られ  
ていたラズベリー。国際的にも高い生産量を誇る。

伊藤忠商事 ベオグラード事務所長  
橋本茂生(はしもと・しげお)さん

2018年4月、現職に就任。セルビアおよび西バルカン諸国  
とのビジネスを通じて大きなポテンシャルを感じており、環境  
関連や農作物・工業関連等あらゆる分野でのビジネス拡大  
に取り組んでいる。

セルビアはEU加盟を見据えさ  
まざまな環境案件に取り組んでおり、  
弊社も深く関与しています。首都ベ  
オグラードでは廃棄物処理発電事業  
の設備建設を開始し、また既存の石  
炭火力発電所向け排煙脱硫装置の  
供給を「三菱日立パワーシステムズ」  
と履行中です。

セルビアは農産物が豊かな国で、  
特にラズベリーやプラム・スモモの  
生産量は国際的に上位にあります。  
弊社は子会社を通じてフルーツ販売  
企業に出資するとともに、糖度の高  
いイチゴの日本向け輸出を行って  
います。今後もさまざまな産業のビジ  
ネスを進めることで、セルビアおよ  
び西バルカン諸国が持つ大きな可能  
性を広げられたいと思います。



三つのチャンネルを  
統合

トルコ語、エジプト語、ロマ語を含む8言語による一般チャンネル「RTK 1」の夕方のニュースを担当するスタッフたち。話せる言語が異なるため苦労はあるが、スタッフ間の情報共有に力を入れている。

コソボラジオ・テレビ局(RTK)ディレクター長  
ロリック・アリファイさん(奥左)

一般チャンネルの「RTK 1」、情報番組チャンネル  
の「RTK 3」、アート・文化チャンネルの「RTK 4」の  
3つを統括する。「プロジェクト実施後は、技術面や  
編集面について異なる民族間でコーヒーを飲みな  
がら話をより親密になり、番組制作がやりやす  
くなりました」。

左:JICA供与の機材により全チャンネルの放送設備が  
統合されたマスターコントロールラウンジ。パソコンによる  
制御システムで操作性がよい。右:「RTK 2」内のス  
タジオ。家庭用モニター6台を組み合わせて巨大モニ  
ターとして使用し、コスト削減の工夫をしている。



CASE  
2

## 番組制作を通じて 育む民族間理解

案件名 コソボ国営放送局能力向上プロジェクト  
2015年10月～2019年3月

セルビア語  
チャンネルを統括

RTK2ディレクター代行  
アレクサンドラ・エヴァノビッチさん

2013年に開設されたセルビア人向けチャンネル  
「RTK 2」を担当。「RTK 1」と協力しながら番組  
制作を行い、国際的なグラブアップを受賞した番組  
もある。「アルバニア人の中で起きていることや  
彼らの主張を番組視聴を通じてセルビア人が知  
ることが両民族のつながりを生むと思います」。

特定の民族への偏りがない中立的な  
情報を放送するため、「ジャーナリストハ  
ンドブック」を作成。英語、アルバニア  
語、セルビア語で記載されている。

異なる民族が一緒に働く

コソボの人口比率は92パーセン  
トがアルバニア人で、セルビア人  
が5パーセント、トルコ人などの  
民族が残りの3パーセントを占め  
ている。コソボ紛争終結から20年、  
今なお民族間には心情的なわだ  
かまりが残るとされる。コソボ唯  
一の公共放送局である「コソボ  
ラジオ・テレビ局(RTK)」では、  
2013年にセルビア人向け  
チャンネルを開設したが、スタッ  
フの交流はなかなか進まなかつた  
という。

JICAのプロジェクトでは、  
偏った情報は民族融和を阻害する  
という考えのもと、15年から  
RTKが正確・中立・公正な情  
報を提供するマスメディアのモデ  
ルとなるための取り組みを進めた。  
特定の民族への偏りがない番組制  
作のため、日本の番組を教材にし  
て制作方法を理解してもらい、  
ジャーナリストの心得を明記した  
手帳も作成。さらに、放送環境整  
備に取り組み、RTKが持つ5  
チャンネルすべての放送設備を統  
合した。

番組制作ではデジタル  
化が進んでいるが、イン  
フラ整備の遅れにより、  
現在でもアンテナ送信  
によるアナログ放送を  
行っている。

また、プロジェクトの提案に  
よって共同制作番組が二つ誕生し  
た。ディレクター長のロリック・  
アリファイさんは、「情報番組の  
『In Focus(イン・フォー  
カス)』は、今では放送回数が30  
回を超え、政治や選挙などのデリ  
ケートな話題も取り扱うようにな  
りました。もう一つの『UMAMI  
(ウマミ)』は、食と野外劇に関す  
るドキュメンタリーです。どちら  
も民族混成チームで共同制作して  
います」と話す。

このような取り組みを通じて  
RTK内でも民族融和の意識が  
高まり、今では夕方の時間帯に8  
言語に対応した10分ずつのニュー  
ス番組を企画・制作するまでに  
なった。よりよい放送を目指して  
正確な情報を伝えるため、バック  
グラウンドの異なる人たちが同じ  
職場で仕事に励み、新たな試みを  
続けている。

